

学際的パースペクティブからみた社会空間

アン・バッティマー

(加藤政洋 訳)

Anne BUTTIMER

Social space in interdisciplinary perspective

Geographical Review, 59, 1969, pp.417-426

© 1996 by Geographical Review

劇的でわくわくするような挑戦に今日の地理学者たちは直面している。経験的な社会パターンにおける革命的な諸変化は、多くの伝統的な分析手順をすたれさせてきた。要するに、斯学でのラディカルな移行は、社会-科学的手順の哲学的基礎にかかわる問題を浮かび上がらせてきたのである。行動主義者や実存主義者はその基本的な問いを提示する。すなわち、科学が客観的外観を見定め説明すること、そして社会的現実の構造を強調することによって、ひとつの有用な機能として役立ち続けることができるのか、あるいはその主観的側面を理解して結合しなければならないのか、ということである¹⁾。エドワード・T・ホール Edward T. Hall²⁾はより説得的にそれをつきつける。時間が語り、空間が話す？時間と空間の沈黙の言葉は、どのようにして人間の文化的変奏に影響するのか。地理学者は、われわれはある不透明なもの、つまり空間における社会的パターンの客観的地図を描くことで満足してよいものか、あるいは主観的または内面的観点からこのことを補わなければならないのか、と自問する³⁾。

この問題はじつのところ目新しいものではない。ジュール・シオン Jules Sion のノルマンディに関する1908年の研究は、ノルマンディおよびピカルディの小農の心性の差異が自然環境の類似するふたつの地域にどのようにコントラストをもたらしたのかを示した⁴⁾。ピエール・グルー Pierre Gourou がうまく適用した文明化の概念は、いかにして態度と技術が極東における景観の発展に影響したのかを明らかにした⁵⁾。ウォルター・ファイリー Walter Firey の著名なポストン研究は、文化的変奏と伝統がどのように都市域の地価に影響してきたかを例証し⁶⁾、ルネ・ロシェフォー

ル Renee Rochefort のシチリア島研究は⁷⁾、その島の社会生活に圧倒的に影響を及ぼしている虚構(マフィア!)をあばいた。したがって、原則的にかつ実際にも内実のある研究は、地理学的研究にこの主観的な構成要素に関して、洞察力のある分析が必要であることを示している。ポール・クラヴァル Paul Claval は最近の論考で、地理学者に固有の貢献は集団心性の比較文化的な研究でなされるであろう、と提示してさえもいる⁸⁾。しかしながら、この種の分析的試みに通じる具体的で適用可能な探究に取り組んできた研究者はほとんどいなかった。このような線にそったいくらか創造的な前例を導入してきた人々のなかに、社会空間という概念を展開したマクシミリアン・ソール Maximilien Sorre とポール=アンリ・ションパール・ドゥ・ロウ Paul-Henri Chombart de Lauwe というふたりのフランス人研究者がいる。本稿は、フランスにおいて地理学者と社会学者の対話をとおして発展した社会-空間概念の特定の側面を描き、そして今日の都市研究でのその適用を議論する試みである。

多くの新しい地平に目を向ける伝統的地理学者ソールと、おなじく普遍的な地平を目的とする社会学者-人類学者ションパール・ドゥ・ロウは、多くの点で共通する特徴をもっている。ある意味では、ふたりとも彼らの自国では受け入れられていない先駆者といえる。フランスの地理学者たちはソールに対してあまり明白な賛辞を与えてこなかった。つまり、彼らはソールを異端で、くだい人物で、哲学と科学を混同しているのではないかとみなす傾向にあった。ソルボンヌ出の社会学者たちはションパール・ドゥ・ロウの研究を、浅薄で、価値観を帯びた、主流に対しては周縁的であ

るとみなしてしばしば退けてきた。しかしながら、フランスでの反響がわずかなものであるにしる、国際的にはそうではない。つまり、ソールの考えは地理学以外のディシプリンで幅広く読者に注目されてきたし、ジョンバル・ドゥ・ロウによって打ち立てられた先例は、社会学および地域プランニングの多くの学派に歓迎されてきたのである。

ソールの地理学に対する多くの貢献には、一步先んじて他のディシプリン、とりわけ生物学、社会学との接触が含まれる。彼の傑作『人文地理学の基礎』の第1分冊は⁹、その「人文地理学の生物学的基礎」という副題から明らかなように、生態学的テーマで買われている。第2分冊はより社会的な、そして時には心理学的なテーマを持っており——社会的集団化は彼らの環境の文脈のなかに位置付けられて、「社会生活の技術」として論じられた——、第3分冊では、農村景観における集団活動、態度、そして文化的伝統が可視的に刻まれたものとしての居住パターンを論じている。ジョンバル・ドゥ・ロウがいまや著名となった彼のバリ研究¹⁰の着想を得たのは、まさしくソールの『基礎』の第3分冊からであり、その研究のなかで彼はソールによって漠然と定義された「社会空間」という概念を適用し、おし広げた。

ソールは若い仲間たちの調査から結論を書き、1950年代には彼の社会空間概念の適用をより推し進めた¹¹。おなじころ、ジョンバル・ドゥ・ロウと彼の仲間たちは、新たな前線を進み、より都市問題に傾倒しつつ空間的プランニングに関わっていた。

社会空間の概念

社会空間という概念は、最初エミール・デュルケム Emile Durkheim によって 1890 年代に言明され適用されたのであり、社会的差異化に関する研究への彼のアプローチがその端緒といえる。デュルケムはフリードリヒ・ラッツェル Friedrich Ratzel の『人類地理学』における環境決定論、ハーバート・スペンサー Herbert Spencer の『社会学原理』に含意された進化論、そしてゲオルク・ジンメル Georg Simmel の『社会分化論』の形式主義に異議を唱えた¹²。デュルケムは純粋に社会的な視点で社会的差異化を考察した。その視点とは、つまり、社会形態学からなる社会学であり、それは社

会基体 *substrat social* (社会形態の分布) および社会生理学の研究であり、またそれは社会の区分・相互作用・「精神的密度」の研究である¹³。彼の社会基体の定義は、自然環境から独立した社会的環境、あるいは集団のフレームワーク、というものであった。ソールは環境に関するデュルケムの定義があまりにも狭小であると考え、自然条件が社会的差異化に影響した多くの事例をあげた¹⁴。彼は社会基体が自然環境と社会環境を結合すべきであると考え、この二要素の基体に対して、その元来の意味に自然環境を含むことで適格になるデュルケムの「社会空間」という術語をあてた。

社会空間の分析における地理学者の基礎的な貢献は、多様な社会集団の分布(デュルケムの「社会形態学」)を、なによりもまず地固化したことにあるとおもわれる。しかしながら、ヴィダル学派の地域モノグラフもまた、例えば、変化する環境(基体)における人間集団の創造的役割を示すことで、社会生理学に貢献した¹⁵。ソールのフレームワーク全体にある社会空間の概念を人文地理学へ定位するために、われわれは『基礎』で示されたいくつかの概略的なポイントを思い起こさなければならぬ。ソールによれば、社会生活とはひとつの不可分なまとまりであり、それゆえ組織のパターン——家族・親族集団から国家・政治的ブロックにいたるまで——は、社会生活の「技術」であった¹⁶。その結果、彼は政治空間(ある特定の国家の生活圏)あるいは経済空間(成長の極を取り囲む機能地域)が、社会空間の諸相を構成していると考えた。彼がより純粋な社会的性質の諸空間(例えば、宗教・民族・言語空間)について論じると、彼の言葉は混乱し、いくらかあいまいなものとなった。

したがって、グローバルなスケールで、ソールは社会空間をその居住者の空間認知という点からそれぞれ均質な地域のモザイクとして考察した。その地域はそれぞれ、ある「特別な地点」(劇場、学校、教会あるいは他の社会活動の中心)から発せられる点と線のネットワークによって同定される。各集団はそれ自体に固有の社会空間を持っており、そこには特定の価値・選好・願望が反映されている¹⁷。社会空間の密度は、諸集団間の補完性、したがってその相互作用の程度が反映される。これはソールの地理学者仲間には異端に思われたが、社会学のジョンバル・ドゥ・ロウを啓発し、彼は経験的な都市研究にソールの考えを適用し

た。いま、この応用のいくつかを考察してみよう。

居住地の知覚と都市社会空間

シヨンバル・ドゥ・ロウの著名な1952年のパリの共同研究は、社会空間概念の新たな側面を描き出してみせた。例えば、社会空間を構成する客観的な要素と主観的な要素の間にはある相違がみられた²⁴。客観的社会空間は「諸集団が生活する空間的フレームワークで、その集団の社会構造・組織は生態的・文化的要素によって条件付けられてきた」と定義された²⁵。主観的社会空間は「特定の人間集団の構成員によって知覚される空間」と定義された。したがって実際には、都市の空間的パターンはふたつのレベルで研究された。つまり、郊区 *arrondissement*、街区 *quartier*、セクター *secteur* それぞれが最初に客観的視点で記述され——その物理的境界およびコミュニケーションのネットワークからなる空間的セッティング——、つぎに、その居住者によって主観的に同定される部分が、知覚される側面と特徴という観点で記述された。多くの場合、客観的「空間」と主観的「空間」は一致しなかった——価値・願望・文化的伝統を反映している主観的空間は、その環境の客観的側面を意識的にあるいは無意識的に至めたものである。

居住者の知覚というテーマ（居住概念）は、ソールの社会空間に関する本来の定式と、シヨンバル・ドゥ・ロウのその後の探究の間にある連続性をよく示している²⁶。『基礎』の第3分冊で、ソールは、すべてのライフスタイル（生活様式 *genre de vie*）は典型的な居住形態にそれ自体を刻みこむ傾向があることを提示した。例えば、農村の居住の場合、彼は、労働のリズム、農業形態、社会構造、そして経済活動がどのように住宅のタイプや村落のパターンに関係付けられるかを示した。彼は長々と「農村生活の生態学」、つまり、社会、経済、そして地理的環境が調和的に結びついたひとつの凝集した全体について記しており、それらが地域の居住形態に反映されていたのである。だが、都市的文脈においては、ソールの生態学的方式では、その居住を機能的視点で説明するあるいは記述することはできなかった。ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシェのように、ソールは心情的には田舎者であり、そして彼はすばらしい社会的功績としての都市化に敬意を払っているにもかかわらず、スモッグ、公害、人種的不

和の影響を弱めるもの、および彼の愛用する「居住生態学」を無用の長物にするものを一貫して非難した。真に都市居住の生態学を探究したのは、シヨンバル・ドゥ・ロウその人だったのである²⁷。彼の研究全体に行き渡っているふたつの重要な概念は、一方が社会空間であり他方が社会環境であった。

社会空間

シヨンバル・ドゥ・ロウによれば、都市社会空間とは諸空間のヒエラルキーを内包するものであり、それらのなかで諸集団が生活し、移動し、相互に作用する²⁸。まず「家族的空間」、つまり家庭レベルで特徴的な社会的相互作用の諸関係のネットワークがある。つぎに「近隣空間」、つまり日常的でローカルな移動をとりまくネットワークがある。さらに「経済空間」があり、それは特定の勤務地を取り囲んでいる。そして最後に「都市セクター」、つまり「都市地域」の社会空間がある。これらの空間的地平が徐々に広がりそして一部重なり合う次元は、集団の社会的活動の毎日の、週間の、そして時折の軌道を反映し、かつ諸集団が気楽にできるようなノーマルな空間的フレームワークを構成する。

シヨンバル・ドゥ・ロウは、ある集団が欲求不満や緊張、そしてアノミーを感じずには移動できない、空間の関があることを推察してきた。そのような関は、都市プランナーに有用なリファレンスを提供し、ハウジングや近隣区画が満足にたるためのクリティカルな指標を構成する²⁹。しかしながら、社会的専門職集団では相互間で空間の知覚がおおきく異なるという興味深い複雑な問題が生じてくる。それぞれの社会的専門職集団に共通する特徴的な空間のピラミッドまたはヒエラルキーを識別することができ、これらのヒエラルキーの多様な結合は都市域のなかで見出し得る³⁰。したがって、水平に見たときの社会空間は、毎日の、週間の、そして時折の道筋を制限するおおよそでは同心円状または扇形のネットワークから成る³¹。

シヨンバル・ドゥ・ロウは社会空間の垂直的次元も探究してきた。一人当たりの望ましい居住密度は何平米であるのか。多様な密度の閾値が動物から得られてきたにもかかわらず、居住密度の十分なレベルに関する客観的指標はほとんど存在しない³²。過密やストレスの影響は研究されてきており³³、合衆国の市

民・防衛動員本部は、シェルター内での一人当たりの充分な空間に関する特別勧告を出してきた²⁰。しかしながら、これらの指標は異常な状況にみあったものであり、通常の状況下での最適なレヴェルというよりも、むしろ強制下での許容閾を設定する。シオンパール・ドゥ・ロウがパリの労働者階級家族の居住環境を分析した際に、彼は一世帯の一人当たりに10~13 m²という密度が最適であることをつきとめた²¹。一人当たりの居住密度が8~10 m²以下のところでは、おそらく過密さゆえに、犯罪率、アノミー、緊張が増大する。居住密度が14 m²以上のところでは、向上志向の社会経済階級に特徴的な親子関係のパターンに起因する他の社会的・心理的諸問題が生じた²²。結果として、明確な、ひとつの社会経済階級に望ましい居住密度の客観的指標が検出された。

ここで振り返ってみると、ソールの社会空間における地域の範囲設定基準が、言語、民族集団、国民国家、そして生活様式のような巨視的で普遍的なカテゴリーに基づいていたのに対して、シオンパール・ドゥ・ロウの基準は微視的でより社会的であった（例えば、社会経済的集団や特に興味深い集団）。ふたりの間のその対照性は、そのアプローチにおいてのみならず、そのスケールでもそうであった。つまり、一方が一般に世界を、そしてとりわけ農村の居住を問うたのに対して、他方はかたくなに都市環境を志向した。

社会環境

都市的文脈においても、シオンパール・ドゥ・ロウの研究には補足的な概念、すなわち社会環境という概念が見出される。社会環境とは何を意味するのか。カルチエ・ラタンの生活とモンマルトルの生活とが同じでないことはすべての小学生が知っているし、ましてやモンバルナスと20区との比較もそうであるが、これらの場所の社会環境を構成する実際の要素を具体的に記述するのは、いかなる定義または方式なのか。シオンパール・ドゥ・ロウは3つの異なるレヴェル、すなわち、地理的環境 *milieu géographique*、つまり時間-空間フレームワーク、技術的環境 *milieu technique*、つまり技術力のレヴェル、そして、文化的環境 *milieu culturel*、つまり居住者によって知覚される、あるいは他者によって考えられている伝統的環境、を定めたの

である²³。3つのレヴェルすべてが不可分に結びついて、効果的な社会環境を構成し、その文脈においてすべての社会的行動が位置づけられる。

だが、社会環境という全体論的な概念を保持しつつ同時に、システムティックな分析のために、いかにしてこれらの3つのレヴェルを区分するのか。シオンパール・ドゥ・ロウはアメリカ社会学に顕著な因子分析的アプローチを批判する。彼は「因子」や「要素」といような術語をもちいることを拒み、そのかわり、諸関係の定方向パターンを含意する他の概念をもちいる。彼は、それを明確な部分からなる実際の構造として論じるよりも、ある環境をひとつにまとめる入り組んでいて複雑な繊維として読み解くことが重要である、と考える。したがって彼は、認識可能な全体的調和をめくりそれ自体をおりなす多様性にも言及する。しかしながら実際には、彼自身の方法論的な手順は、諸現象の5つの主要なグループについての入念にあてはめられた因子分析にすぎない、とみなされるものであった。その5つとは、(1)時間-空間フレームワークにおける人口パターン、(2)経済活動パターン、(3)社会的な集団・関係・行動・態度、(4)コミュニケーションと文化・精神生活、そして(5)教育水準である²⁴。したがって、この総体をなすそれぞれが、ひとつのシステムつまり有機的な全体性を構成し、その構成集団の価値システム、態度、ニーズによって、他の総体と関係づけられる。われわれは再度、社会環境と特定の諸集団の社会空間のヒエラルキーの現出との関係を目にするのである。パリの東部、西部、中央の間の基本的な差異を構成するのは、事実、社会-環境と社会-空間のヒエラルキーの結合されたコントラストである²⁵。

ソールの要約:協同研究への途

1950年代後半までに、ソールは彼のオリジナルの考えを要約することができ、そして彼のオリジナルの提案のいくつかを修正し、否定し、改良することができた。彼は間違いないく、異なる集団の生活パターンにおいて空間は異なる意味を帯び、そしてこの差異はパリの地理に影響されるという経験的証拠を見て喜んだ。だが、このたしかな成功もすたれる徴候があったのではないか。これらの諸発見は、都市研究において自然「地理的」空間がさほど重要ではない、という証拠だ

ったのか。それどころか、ソールは、都市地理学者の課題は、社会空間をあるひとまとまりの構造的な「諸空間」に細切れにすることではなく、むしろこれらが特定の都市域の具体的な生活状況においてどのように調和されるのか調査することであると注意した³⁶。そのバリ研究から、いくつかの証拠があがった。例えば、ある集団の願望が彼らの到達できる地平を越えていたとき、あるいは空間的に並列した諸集団が空間についてひろく対照をなすような考え方をしていたときには緊張が生まれ、それは空間的行動に影響し、したがって都市セクターの地理に影響している、というものであった。

バリでの諸発見は、ソールのもともとの直観（例えば、プチ・クラマールという農村の住宅地に固有の社会的不和は、まったく生活様式の相違によるものであったということ³⁷）を強固なものにし、また他のこと（例えば、都市的文脈における居住形態と生活様式との必然的諸関係）を一掃した。農村居住を支配する生態学的原理を都市的文脈に適用するのは不可能である。というのも、職と住の機能的諸関係が完全に異なるうえ、ブルターニュの小村やロレーヌの村にみられるような社会構造、生活様式、居住形態の明白な調和をもたなかったからである。

ソールが述べたもつとも価値ある結論のひとつは、社会的モビリティや移住のような複雑な問題に関する研究において、地理学者と社会学者が協同して研究できるとしたことである³⁸。そのような協力を通すことでしか、社会的モビリティの空間的モビリティへの関わり方は明らかにならないのであり、あるいはある居住形態を安定させる諸力と農村および都市の諸集団の移住を刺激する他の諸力との心理学的つながりを解明できないのである。変化への抵抗——例えば、ラングドック低地のブドウ畑、ロレーヌの移民コミュニティ、ランカシャーの繊維工業労働者のものぐさ——は、学際的研究にふさわしい主題を提供した。したがって1950年代後半をとおして——そしてとりわけ彼の遺著『大地上の人類』において——、ソールはくりかえし地理学者と社会学者の協同を唱導した³⁹。

シオンパール・ドゥ・ロウと空間嗜好

1960年代初頭から、シオンパール・ドゥ・ロウと彼のチームは多くの最新線を進んできた⁴⁰。例えば、『都

市そして街区への市民の統合⁴¹』は、3つのレベルで、つまり行動のレベル（どこでどのようにして人びとは生活し移動するのか）、知のレベル（もうひとつ別の機会にありつけるということを入びとはどこで知なのか）、そして願望のレベル（人びとにどこかへ行く機会があるならば、彼らはどこへきたがるか）で、社会空間研究にアプローチした。このような研究の全体的傾向はそれゆえ、行動の志向を取り上げるものとなり、ここでまた地理学における現在の研究、すなわち現在フランス人研究者の間ではあまりに有名な意志の地理 *géographie volontaire*⁴² との潜在的なつながりを持ちうるのである。

そこから3つの疑問が浮かび上がる。パリジャンはどこで生活しているのか。彼らはどこで生活したいのか。そして、彼らが望む場での生活を妨げるのは何か。パリジャンは明らかにメトロポリタン・エリアの外側での生活を望み、彼らの雇い主が移動するならば、移住したいと考えている。だが、ロカールの選択に関する社会経済的集団には著しい相違がみられる。概して労働者階級家族は、もし彼らの住宅条件がほどよく適当ならば、パリを離れようとはしない。だが、ほとんどの他の集団は、生活するのに理想的な場所は「地方」だろうと思っている。その魅力ある地域は3つの主な極は、アルプス、南フランス、ブルターニュであり、受け入れる町の最濃度のサイズは、10~40万人の近隣地区である。

内面的な空間嗜好の分析は、社会的専門職集団間により明確な差異を見出す⁴³。(1)郊外への逃避は、主としてリベラルな専門職やより富裕な管理職によってなされる。もし工場労働者の家族が全員転居するならば、そしてそが「郊外内環 inner suburbs」ならば、そこで彼らは公共の交通機関へのアクセスをそのまま持つ。サーヴィス業に従事する人びとは中心部、つまり顧客の近くにどまる傾向がある。(2)ほとんどの居住者集団にとって、生活するのに理想的な場所は、なんらかのアイデンティティをもてる近隣地区である。このアイデンティティは、明確な物的境界、伝統的な世評、商業環境、あるいは人々がその環境に愛着を持つような他の特別な目印によって規定される。(3)社会的な理由による空間的分化の傾向は、事務員や会社員に顕著であり、工場労働者にはあまりみられず、サーヴィス業集団全体ではほとんどみられない⁴⁴。居住分化と空間的モビリティは、ほとんどの場合連動し

て進行する。(4)生活に理想的な場所のもっとも高く評価される特性には、プライバシー、空間、そして地域生活への参加/不参加をどちらも自由に選択できること、などがある。

これらの一般化は、他国に顕著なパターンとの比較で興味深い視点を提供する。合衆国に展開するメトロポリタン郊外の空間秩序は、規定された線に沿うものではないだけでなく、社会的に保持されている価値と判断に対する応答を明らかにしている。最近の論考は、住宅地区のデザインおよび選択に関して増大する社会的意識、そして経済力の重要性が相関的に衰退していることを示している。したがって、社会的あるいは政治的文脈がどうであれ、われわれは、今日の空間形態の主たる決定要素として、市場経済の原理に対する個人的な応答よりも、むしろ空間嗜好による幅広いプランニングの受容をみる。

実践的応用

このようなフランスの前例を基にして、今日の都市分析における社会-空間概念の実践的有用性が推察されよう。概してそのもっとも重要な価値は、都市環境のなかでの内的な主観的秩序(態度、伝統、願望)と外的な空間的秩序との間のつながりが前提とされたことにあるかもしれない。これらのつながりに関する探究は、他分野における最近の研究と並行している。

社会空間に類似する概念(例えば、エスニック・ドメイン、ピオトープなど)は人類学に見出せるが、それらのほとんどが生態学的または心理学的観点からアプローチしている。ピオトープは「習慣、あるいは生物が学習・すり込み・本能のなんらかの結合を通じて引きつけられるロカール」である、と社会心理学で定義されている⁴⁰。そのようなピオトープ研究への生態学的アプローチは、北パキスタンのエスニック・コミュニティに関するバース Barth の研究で説明され⁴⁰、そしてホルの「プロクセミクス proxemics の科学」は、類似する概念を都市分析に適用する⁴⁰。ジョンバル・ドゥ・ロウの研究は、これらの観点からすれば、すべてのピオトープは、個人の、家族の、近隣地区の、そして地域の空間からなる内面的なヒエラルキー的構造を持ち、そして第2に、この構造は、社会経済集団それぞれで異なる、ということを示している。

このことは、特定の専門職集団に属する諸個人が、住宅のデザインとロケーション、レクリエーションのニーズ、そして転居傾向の期待を有するピオトープ嗜好の一貫したパターンを持つかどうか、という疑問を浮かび上がらせる。例えば、平日の(「直接の」)空間施設——例えば、オフィス、教室、工場——と週末のレクリエーションの嗜好との間には一貫した関係があるのか。日常的な都市生活における感覚刺激の欠如と、休暇中のアウトドアのレクリエーション活動における感覚刺激の追求との間には関係があるのか。再び、郊外の住宅地開発の回転率に関係付けられる(生態学的・心理学的チームで定義される)ピオトープは、いかにして調整されるのか。メトロポリタンのフリンジの空間的秩序は、この視角から眺める時、魅力的な研究のフィールドを提供する。

ソールが提示した地理学者と社会学者の協同研究の別の可能性は、モビリティと移住の領域にある。中産階級のアメリカ人の中では、空間的モビリティは社会的モビリティと密接に関係している、というのは陳腐な決まり文句である⁴⁰。しかしながら、メトロポリタン郊外での転居傾向における階級別の差異は、以前から考えられていたよりもあまり明確には定義されていない。ジョンバル・ドゥ・ロウは、パリジャンの文脈で、居住の変化の背後にある動機について解明し、その理想を達成できなかったら、精神病や社会的緊張にいたることを示してきた⁴⁰。それゆえ社会空間の概念は幾多の異なる研究の方向性を生み出す発見的・発生的概念として与えられ、それぞれが異なる専門科の専門家たちによってよりすどく分析され得るだろう。それは、将来、空間における人間行動の主観的次元に関する学際的研究を調整するフレームワークとして与えられるかもしれない。社会科学の歴史における多くの豊かな思考のように、単一に統合された分析的概念としての社会空間の分裂と継承は、探究の旅の新たな収穫の当然のプレリユードにすぎない。

パースペクティブからみたソールと ジョンバル・ドゥ・ロウ

ソールとジョンバル・ドゥ・ロウは、共通する哲学的・方法的思考にもかかわらず、ひとつの点で根本的に異なる。つまり、ソールはプランニングの思考

に彼自身けって満足できなかったが、一方でシオンパール・ドゥ・ロウの研究はほぼ完全に実践的な到達点に達していた。これは世代の差を反映しているのかもしれない。ソールは戦前ブルジョアの「知識のための知識」という伝統を代表し、シオンパール・ドゥ・ロウは戦後の非アカデミックな前衛的スタイルで知識をもちいた。見解に根本的な相違があるゆえ、彼らの著作は異なるパースペクティブから評価されねばならない。ソールの研究は本質的にはある種の机上での概念化であり、経験的研究への序として、そしてそのための組織化されたフレームワークとして役立つ。一方で、シオンパール・ドゥ・ロウは一見したところ、急を要する社会問題の早急な解決に達することを強く望んでおり、時には容易に適用できる結果に行き着くために分析部分をあまりに急ぎ足で通り過ぎていようである。

振り返ってみて、このふたりの研究者がわれわれに与えたものは、簡単に使用できる探究の方式というよりも、むしろ一連の概念的なガイドラインである。偉大な人文学者ソールは、社会地理学を教示するための良質な教科書を残してきたが、彼は学派を確立しなかった。つまり、彼の提案した前例を突明した弟子は、少なくとも表向きにはほとんどいなかったのである。シオンパール・ドゥ・ロウは、マルセル・モース Marcel Mauss とモーリス・アルブヴァクス Maurice Halbwachs の時代からのフランス人社会学者を超えた最初の偉大な国際主義者である、と多くの点から考えられるだろう。彼は、社会科学のアメリカ、ドイツ、英国の学派で発展した多くの概念的な方向を単純化し統合した。それゆえ、特定の学派に属する専門家間とおなじく多様な伝統間の対話を活気付けるのに貢献した。彼は、社会学者が建築家やエンジニアと交流できるような共通言語を希求し、そのことは新しい社会環境の創出に際して、市民とプランナーの協力を可能にするだろう。

[註]

- 1) Martin G. Plattel: *Social Philosophy* (Pittsburgh, 1965); A. C. de Wachlens: *Lexistentialisme de Merleau-Ponty* (Brussels, 1963).
- 2) Edward T. Hall: *The Silent Language* (Premier Books; New York, 1965). ホール, T. (岡広他訳) 『沈黙のことは』

兩葉堂, 1966. *The Hidden Dimension* (Garden City, N.Y., 1966). ホール, T. (日高他訳) 『かくれた次元』みすず書房, 1970 も参照。

- 3) Paul Claval: Géographie et psychologie des peuples, *Rev. de Psychologie des Peuples*, Vol. 21, 1966, pp.386-401; 同: *Essai sur l'évolution de la géographie humaine* (Paris, 1964). R. W. Kates and J. F. Wohlwill, eds.: *Man's Response to the Physical Environment*, *Journ. of Social Issues*, Vol. 22, No. 4, 1966 も参照。
- 4) Jules Sion: *Les paysans de la Normandie orientale: Pays de Caux, Bray, Vexin Normand, Vallée de la Seine: Étude géographique* (Paris, 1909). ポール・ヴィダル・ドゥ・ラブラーシュ Paul Vidal de la Blache による、この研究のレビュー (the *Annales de Géographie*, Vol. 18, 1909, pp.177-181) も参照。
- 5) Pierre Gourou: *Étude du monde tropical, L'Annuaire du Collège de France*, Vol. 63, 1962-1963, pp.261-275; 同: *Changes in Civilization and Their Influence on Landscape*, *Impact*, Vol. 14, 1964, pp. 57-71.
- 6) Walter Firey: *Land Use in Central Boston* (Cambridge, Mass., 1947).
- 7) René Rochefort: *Le travail en Sicile* (Paris, 1961).
- 8) *Géographie et psychologie des peuples* [註 3 参照]。
- 9) Maximilien Sorre: *Les fondements de la géographie humaine* (3 vols.; Paris, 1943-1952). ソールの著作の要旨については、Françoise Grivot: *Bibliographie des oeuvres de Max. Sorre, Annales de Géographie*, Vol. 72, 1963, pp. 186-191 を参照。
- 10) *Paris et l'agglomération parisienne* (by P.-H. Chombart de Lauwe and others; 2 vols.; Paris, 1952). Vol.1, pp. 19-26 の、シオンパール・ドゥ・ロウによる諸言を参照。
- 11) Maximilien Sorre: *Les migrations des peuples: Essai sur la mobilité géographique* (Paris, 1935); *Rencontres de la géographie et de la sociologie* (Paris, 1957). ソール, M. (松田信家) 『地理学と社会学の接点』大明堂, 1968: および *La géographie psychologique: L'adaptation au milieu climatique et biosocial, Traité de psychologie appliquée* (Paris, 1968) 所収, Vol. 6, Chap. 3, pp.1343-1393.
- 12) Émile Durkheim: *De la division du travail social* (Paris, 1893; 5th edit., 1926). デュルケーム, E. (田原音和訳) 『社会分業論』青木書店, 1971. 同: *Les règles de la méthode sociologique* (Paris, 1895). デュルケーム, E. (宮島清訳) 『社会学的方法の規準』岩波文庫, 1978; Friedrich Ratzel: *Anthropogeographie* (2 vols.; Stuttgart, 1882 and 1891); Herbert Spencer: *Principles of Sociology* (London, 1876); そして Georg Simmel: *Soziale Differenzierung* (Berlin, 1890) ジンメル, G. (居安正訳) 『社会分化論 社会学』所収, 青木書店, 1970 も参照。
- 13) 『社会分業論』[註 12 参照]。
- 14) ソール 『地理学と社会学の接点』[註 11 参照], 第 1 章。

- 15) 前掲。
- 16) Maximilien Sorre: *L'homme sur la terre*(Paris, 1961).
- 17) マクシミリアン・ソール: 「地理学者の空間と社会学者の空間」(『地理学と社会学の接点』[註11参照]所収, pp. 67-91.
- 18) Chombart de Lauwe and others [註10参照]. Paul-Henri Chombart de Lauwe: *Paris: Essais de sociologie* (Paris, 1966) も参照。
- 19) Chombart de Lauwe and others, *Paris et l'agglomération parisienne* [註10参照]. および Chombart de Lauwe, *Essais de Sociologie* [註18参照], pp. 96-101.
- 20) Paul-Henri Chombart de Lauwe: *Famille et habitation: Vol. 1: La vie quotidienne des familles ouvrières*(Paris, 1966), および Vol. 2: *Science humaines et conceptions de l'habitation* (Paris, 1959).
- 21) ショーンバル・ドゥ・ロウの生態学的・統合的論調は、彼のレクチャーや論文にもっともよく表われている。例えば、1966年11月にルーヴァンで述べられた「社会学・人間社会学・社会的変革」という彼のレクチャーや、*Revue de l'Enseignement Supérieur*, Nos. 1-2, 1965, pp. 11-19に発表された。彼の *Des hommes et des villes*(Paris, 1965) も参照。
- 22) Paul-Henri Chombart de Lauwe: *L'évolution des besoins et la conception dynamique de la famille, Rev. Française de Sociologie*, Vol. 1, 1960, pp. 403-425; および同: *Le milieu social et l'étude sociologique des cas individuels, Information Sociales*, No. 2, February, 1965, pp. 41-55.
- 23) *Famille et habitation* [註20参照], Vol. 1; *Des hommes et des villes* [註21参照]. 到達できない地平の病理学的影響については、Paul-Henri Chombart de Lauwe: *Hypothèses pour une psychosociologie de la fatigue, Rev. de Médecine Psycho-somatique et de Psychologie Médicale*, Vol. 3, 1966, pp. 275-286 を参照。
- 24) Chombart de Lauwe, *Des hommes et des villes* [註21参照].
- 25) Chombart de Lauwe and others, *Paris et l'agglomération parisienne* [註10参照].
- 26) Neal M. Burns, R. M. Chambers, and E. Hendler: *Unusual Environments and Human Behavior* (New York, 1963).
- 27) John B. Calhoun: *Population Density and Social Pathology, Scientific American*, Vol. 206, No. 2, 1962, pp. 139-148; W. Craig: *Why Do Animals Fight? International Journal of Ethics*, Vol. 31, 1921, pp. 264-278.
- 28) *Guide for Executives* (Office of Civil and Defense Mobilization, Battle Creek, Mich., 1969 [OCDM NP-10-1]; *Guide for Architects and Engineers* (同, 1960 [OCDM NP-10-2]). *Procedures for Managing Large Fallout Shelters* (Dunlap and Associates, Stanford, Calif., 1969) も参照。
- 29) Chombart de Lauwe, *Famille et habitation* [註20参照], Vol. 2.
- 30) ホール『かくれた次元』[註2参照].
- 31) これは *"Le rôle de l'observation en sociologie"* (*Rev. de l'Institut de Sociologie* [Université Libre de Bruxelles], Vol. 1, No. 1, 1960, pp. 27-43)で、とくに強調されている。
- 32) 前掲: *"Le milieu social et l'étude sociologique des cas individuels"* [註22参照] も参照。
- 33) *Paris et l'agglomération parisienne* [註10参照], Vol. 1, pp. 68 ff.
- 34) *Recontres de la géographie et de la sociologie* [註11参照].
- 35) Chombart de Lauwe and others: *Paris et l'agglomération parisienne* [註10参照], Vol. 1, p. 243.
- 36) *Recontres de la géographie et de la sociologie* [註11参照], pp. 53-86.
- 37) 前掲: *"L'homme sur la terre"* [註16参照], pp. 96-101 も参照。
- 38) 主要グループ「社会民族センター-Centre d'Ethnologie Sociale」の本部は、モンルーージュである。国立科学研究センター-Centre National de Recherche Scientifique から助成を受けた共通テーマ「社会生活の発展」には、学際的研究が見られる。「社会集団研究センター-Centre d'Études des Groupes Sociaux」という興味深い副産物が、都市計画に関わる実践的問題、例えば、パリで現在実行されている分散化計画に役立っている。
- 39) *L'intégration du citadin à sa ville et à son quartier* (4 vols.; Paris, 1962-1965). 彼らの *Logement et vie familiale: Étude sociologique des quartiers nouveaux* (Centre d'Études des Groupes Sociaux, Paris, 1965), および *L'attraction de Paris sur sa banlieue* (Paris, 1965) も参照。
- 40) ジャン・ラバス Jean Labasse の研究は、フランス人地理学者たちのこの新しい傾向に関するおそらくもっともよい説明である。彼の *L'organisation de l'espace: Éléments de géographie volontaire* (Paris, 1966) を参照。Jean Gottmann: *Essais sur l'aménagement de l'espace habité* (Paris, 1966) も参照。
- 41) *L'intégration du citadin à sa ville et à son quartier* [註39参照]の研究には、いくつかの共通する結論がある。
- 42) Donald J. Bogue: *The Structure of the Metropolitan Community* (Ann Arbor, 1949); William M. Dobriner: *Class in Suburbia* (Englewood Cliffs, N. J., 1963); Herbert J. Gans: *The Levittowners* (New York, 1967); Gerardus Antonius Wissink: *American Cities in Perspective, with Special Reference to the Development of Their Fringe Areas* (Assen, Neth., 1962).

- 43) Robert Sommer: Man's Proximate Environment, *Journ. of Social Issues*, Vol. 22, No. 4, 1966, pp. 59-70; p. 62 参照。
- 44) Fredrik Barth: Ecologic Relationships of Ethnic Groups in Swat, North Pakistan, *Amer. Anthropologist*, Vol. 58, 1956, pp. 1079-1089.
- 45) ホール『かくれた次元』[註2参照]。
- 46) 例えば、Walter T. Martin: *The Rural-Urban Fringe* (Eugene, Ore., 1953); Amos Hawley: *The Changing Shape of Metropolitan America* (Glencoe, Ill., 1966); R. E. Pahl: *Urbs in Rure: The Metropolitan Fringe in Hertfordshire*, *London School of Economics and Political Science Geographical Papers* No. 2, 1965 を参照。
- 47) Chombart de Lauwe: *L'attraction de Paris sur sa banlieue* [註39参照]。

社会の本質を

メトロ

メトロポリタン

社会の本質を

社会の本質を